

黄帝はバビロンより来たり  
——ラクーペリ「中国文明西來說」および東アジアへの伝播（その一）

孫 江

# 黄帝はバビロンより来たり ——ラクーペリ「中国文明西來說」および東アジアへの伝播（その一）

## Babylonian origins of Huang Di (The Yellow Emperor) : Lacouperie's Sino-Babylonianism and its spread to East Asia ( I )

孫 江

文化政策学部国際文化学科

SUN Jiang

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では、近代知の生産と流通という角度からヨーロッパの中国文明西來說について考察する。

一八八〇年代から一八九〇年代にかけて、ラクーペリは一連の研究のなかで、黄帝は両河流域のバビロンから移住してきたのであり、ゆえに中国人（漢人）の祖先はバビロンのカルデア人であった、という仮説を提出した。ラクーペリは、ビクトリア時代のイギリス経験主義の学問的潮流のなかで注目されたアッシリア学研究から多くのヒントを得た。彼は中国語とカルデア語を比較し、文献と出土品をつき合わせて両者の共通点を見いだすという自らの方法を「言語科学」、「歴史科学」と見なしていた、その研究は当時のヨーロッパ流の東洋学者から批判を受けた。

しかし、ラクーペリの「西來說」は明治期日本に伝わった後、日本の中国研究者たちの間で大きく注目された。反対派桑原隲藏と擁護派三宅米吉、白鳥庫吉の意見対立は、成立したばかりの日本の東洋学がヨーロッパの東洋学に出会った際に遭遇した一つの問題を照らし出している。白河次郎・国府種徳がラクーペリの「西來說」をその著『支那文明史』（一九〇〇年出版）のなかに取り入れたことは、後に「西來說」が中国で受容される直接的なきっかけとなった。

一九〇三年、『支那文明史』の四種の中国語訳は東京と上海でほぼ同時に刊行された。清朝打倒を目指す革命者や「国粋派」は、政治的目標の実現や漢族アイデンティティの確立という観点から「西來說」に関心を寄せた。しかし、その一方で、「西來說」が逆に漢族の外来性を際立たせてしまい、排満革命の政治目標に合致しないことに気づくと、彼らは躊躇なくそれを捨てた。

近代中国のナショナリズムに関するこれまでの研究は、ほとんどの場合、近代中国のナショナリズムを直線的な歴史叙述のなかに組み入れており、そのため、異なるテキスト同士の相違が見逃されがちである。それに対して、本稿は「西來說」の受容に対する考察を通じて、異なる視点からの問題提起を試みた。

This paper traces the European theory of Sino-Babylonianism from the vision of the production and re-production of modern knowledge.

During 1880s-1890s, Terrien de Lacouperie proposed a hypothesis that Chinese migrated from Chaldea of Mesopotamia in prehistoric times. Lacouperie asserted that his opinion was set up by comparative methods called "language science" and "history science". Lacouperie got many hints from Assyriology in the age of Victorian Britain, but he was strictly criticized by first-class Sinologists at that time.

Nevertheless, Japanese Sinologists paid attention to Lacouperie's theory from 1890's to 1910's. Jitsuzo Kuwabara criticized Sino-Babylonianism, but Yonekichi Miyake and Kurakichi Shiratori supported this idea. In 1900, Jirō Shirakawa / Tanenori Kokubu reiterated Lacouperie's opinion in their book *History of Chinese Civilization*. This book had an enormous influence on Chinese intellectuals when it was translated into Chinese.

In 1903, four different Chinese translations of *History of Chinese Civilization* were published in Tokyo and Shanghai. Those who were interested in Sino-Babylonianism were mainly anti-Manchu revolutionists and Chinese conservatives. They wanted to create a racial revolution through constructing Chinese identity. However, they discarded this idea immediately without hesitation as soon as they discovered that the Han(Chienese) themselves would be described as immigrants according to Sino-Babylonianism.

In conclusion, this paper questioned the historical narrative which describes modern Chinese nationalism as a linear history, neglecting the differences among the various texts.

### はじめに

- 一、「言語科学」から「歴史科学」へ——ラクーペリの中国文明「西來說」について
- 二、オリエンタリズムと東洋学の間——明治日本における中国文明「西來說」の受容

### はじめに

一八九四年、フランス系イギリス人研究者ラクーペリ(Terrien de Lacouperie)は、その著『中国上古文明の西方起源』において、中国文明の起源に関して次のように述べている<sup>1</sup>。

紀元前二二八二年、両河流域のカルデア国王ナクフンテー(Nakhunte)はバク族(Bak tribes)を率いてカルデアを出発し、崑崙山を越え、幾度もの困難を経て中国西北部の黄河上流域に辿り着いた。その後、バク族は四方を征伐して文明を伝播し、最終的に中国

歴史の基礎を打ち立てた。

NakhunteはNaiHwangtiとも言い、すなわち黄帝のことである。バク族(Bak tribes)は「百姓」(Bak Sings)の別の発音である。ここで注目すべきは、中国の歴史書において文明の始祖、帝王系譜の起点と崇められた黄帝は、遠い西にある両河流域のバビロンから移住してきたのであり、ゆえに中国人（漢人）の祖先はバビロンのカルデア人であった、というラクーペリの中国文明西方起源説（以下便宜上「西來說」と称する）である。

ヨーロッパの東洋学研究において、中国文明の起源が西方にあるという議論はしばしばなされているが、そのなかでラクーペリの「西來說」は当時においてもその後もけって主流をなす見解ではなかった。しかし、興味深いことに、ラクーペリの「西來說」が東アジア世界に伝わった後、日本と中国で少なからぬ賛同者を得た。日本では、一九〇〇年、白河次郎・国府種徳の『支那文明史』がラクーペリの「西來說」を紹介している。明治期に出版された中

国の歴史を題材とした数多くの大衆向けの書物の一冊であった『支那文明史』は、一九〇三年に中国語に翻訳された。これをきっかけに、ラクーペリの「西來說」は中国知識人の間で大きな反響を呼び、歴史教科書に取り上げられるほどであった。一九二〇年代、考古学の発掘と研究が進むにつれ、ラクーペリの「西來說」は再び注目を浴びたが、繆鳳林<sup>2</sup>、顧頡剛<sup>3</sup>はこれに対して批判や疑問を呈した。そして、南京国民政府成立後の一九二九年、何炳松<sup>4</sup>、金兆梓<sup>5</sup>なども相次いで「西來說」を批判した。批判の矛先はラクーペリの「西來說」だけではなく、清末期に「西來說」を翻訳・紹介した蔣智由にも向けられた。一九三〇年以降、ラクーペリの「西來說」は公共知識を普及する歴史教科書から姿を消した<sup>6</sup>。

一九九〇年代、中国近代ナショナリズムの起源の問題が注目を浴びるなかで、「西來說」は再び議論されるようになった。議論の焦点となったのは、黄帝は清末期にどのようにナショナリズムの象徴として作られたか、という点である。これに関連して、黄帝の起源をめぐる「西來說」も議論された。孫隆基によれば、清末ナショナリズムの象徴的符号であった「黄帝」と「支那」はいずれも日本から中国に入ったものであった<sup>7</sup>。二一世紀に入ってから、石川禎浩は日本との関わりを中心に黄帝の起源と黄帝肖像の由来について分析し<sup>8</sup>、楊思信と李帆は清末期の中国におけるラクーペリ「西來說」の伝播の概況を整理した<sup>9</sup>。近年、吉開将人はラクーペリの「西來說」と苗族「先住説」とを関連させて中国における多民族史観の形成について考察した<sup>10</sup>。韓子奇 (TZE-KI HON) は中国における「西來說」受容のプロセスを概観したうえで、中国におけるネーション・ステートの想像は時間の階梯序列から空間の階梯序列へとという変化の過程を辿ったと指摘している<sup>11</sup>。これらの研究とほぼ同じ時期に、筆者も近代中国の歴史記憶とアイデンティティ形成に関する研究のなかで「西來說」の問題を取り上げた<sup>12</sup>。

「西來說」をめぐるのは、なお数多くの問題が解決されていない。今日においてほとんど顧みられないラクーペリの中国文明「西來說」はどのような背景のなかで形成されたか。「西來說」が中国で受容される際に、日本はどのような役割を果たしたか。清末期の中国知識人はなぜ「西來說」に関心を寄せ、「西來說」をどのように受け止めたか。何よりも、「西來說」に関するこれまでのほとんどの研究は、「西來說」を近代中国ナショナリズムの直線的な叙述 (linear narrative) に組み入れたため、異なるテキスト同士の相違は見逃され、歴史的な概念としての「西來說」が生産・再生産されたプロセスは単純化されがちである<sup>13</sup>。

こうした点を踏まえて、本稿では、従来の研究で必ずしも充分考察されていないラクーペリ「西來說」の内容について検討したうえで、近代知 (modern knowledge) の生産と流通という角度から明治末期の日本と清末期の中国における「西來說」の受容のプロセスについて考察する。

## 一、「言語科学」から「歴史科学」へ——ラクーペリの中国文明「西來說」について

これまでの研究において、ラクーペリの「西來說」とは対照的に、ラクーペリ本人の生い立ちについてはほと

んど触れられていない。ラクーペリの死去から間もない一八九四年六月、彼が編集長を務めた雑誌『バビロンと東方記録』 (*The Babylonian and Oriental Record*) に、ラクーペリの同僚で同誌の編集補佐 H. M. Mackenzie が書いた弔文が掲載されている。筆者の知る限りでは、この文章はラクーペリの生涯に関する最も詳細かつ信憑性の高い記述である<sup>14</sup>。それによれば、ラクーペリは一八四四年にフランス北西部の Havre に生まれたが<sup>15</sup>、ラクーペリはしばしば自分の祖先はイギリス人であり、一七世紀にイギリス南西部の Cornwall から Havre に移住したと述べている。幼少のとき、ラクーペリは工場経営の父親とともに香港に移住し、現地で母語であるフランス語に匹敵するほどの流暢な中国語と英語を習得し、イギリス人の生活スタイルを身につけた。フランスに戻った後、ラクーペリはフランスの法律やフランスの生活に馴染まないためイギリスに移住し、イギリスの国籍を取得した。一八七四年、大英博物館の S. Birch 博士との出会いをきっかけに、ラクーペリは大英博物館の R. S. Poole および R. K. Douglas と親しくなり、印度局 (*India Office*) のヘンリー・ユール (Henry Yule) から財政的援助を得た。ユールは当時イギリスにおける中国研究の代表的人物であり、後述するように、彼も「西來說」の支持者の一人であった。ラクーペリは一時ロンドン大学でインドシナ語の教授を務めたが、これは無給のポストであった。経済的に決して裕福とはいえないラクーペリは、ほとんどすべての金を『バビロンと東方記録』誌の編纂と出版に費やした。そのため、彼の死後、その末亡人は困窮な生活を強いられた<sup>16</sup>。一、二の外国の大学で名誉学位を授与されたことや、碑銘学術賞を授与されたことを除けば、「西來說」に関する数十冊にのぼる本の出版はラクーペリの主要な業績であったといえるだろう。

「西來說」は、ラクーペリが当時ヨーロッパで盛んに行われたアッシリア学 (*Assyriology*) 研究に基づいて、その著『中国上古文明の西方起源』 (一八九四年) のなかで提起した仮説である。四一八頁におよぶこの本は、主にラクーペリが一八八九年から一八九四年にかけて『バビロンと東方記録』に発表した論文をまとめたものである。文献引用の部分が本文を上回り、全体的に、研究書というよりも読書ノートと言うべきであろう。そのなかで、ラクーペリは中国の歴史を六つの時期に分けて、バク族が西アジアから移住してきたとされる時から後漢、三国時代までの中国がアッシリア・バビロン、エジプト、インドから受けた影響について、言語、習俗、出土品などの角度から論証している。それによれば、『周易』のなかにアーリヤ語 (*Aryan*) の単語が含まれており、中国の占星術はカルデアの占星術や妖術に似ている。そして、中国の神話にはペルシャ、エジプト、インド、バビロンの神話の痕跡が残されている。バク族が中国の西北地域に居住してから発行した金・銀・銅の貨幣の図案は、西アジアに起源をもつ母性のイメージに基づいたものである。これらは古代の三つの交易ルート——西方 (新疆経由)・西南 (雲南・四川経由)・東海 (山東経由)——を経て伝わったものである<sup>17</sup>。第八章以降はそれまでの内容の重複あるいは補足である。第八章 (二六四～二九〇頁) は主に西王母と紀元前九八六年の穆天子西征に関する考察である。ラクーペリによれば、現代と違って、古代文献のなかには西王母を女性として描く

記述は見当たらない。西王母は黄帝がバク族を率いてトルキスタンを通った時見た花の国（*Flowery Land*）であり、堯・舜・禹はいずれも西王母と関わりがある。中国の古籍『穆天子伝』が描いたのは、穆王が長い苦しい旅を経て西王母を訪れた時の物語である。第九章（二九一～三一五頁）では、言語学と東西交通の角度から「西來說」を論じている。それによれば、「百姓」は「百の姓」という意味ではなく、カルデア語で王や富を象徴する *Bak Sing* に由来した言葉である。第十章（三一六～三三七頁）では、バク族が西アジアから中国に移住したことに關する伝説を考察している。第十一章（三三八～三七二頁）は、第三、第四、第七、第八、第九章の内容に対する補足である。第十二章（三七八～三九七頁）では、黄帝が紀元前二二八二年にバク族を率いて中国に到着したとされる年から西暦二二〇年までの間における土着の中国人と外来文明の關係に關する年表である。以上がラクーペリ『中国上古文明の西方起源』の概要である。

ラクーペリの生前も彼が死去した後も、『中国上古文明の西方起源』を含むラクーペリの「西來說」關連の著作や論文に対するヨーロッパの東洋学者の反応は冷ややかなものであった。Mackenzi は前出の弔文のなかで、ラクーペリの研究は同時代イギリスの学界に対する「沈黙の抗議」（*silent protest*）であったとしている<sup>18</sup>。一八八八年六月、ラクーペリ「西來說」の支持者で、アッシリア学の代表的な研究者である A. H. セイス（Archibald Henry Sayce）は、『ネーチャー』（*Nature*）誌に掲載された論文のなかで、ラクーペリが『王立アジア学会誌』（*Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*）に発表した『易経』および漢字出現以前の中国文字に關する論文を紹介し、ラクーペリの「西來說」を高く評価した後、「私は東洋学者たちに対し、ラクーペリの結論は立証できるかどうかを問いたい。バビロン研究において、ラクーペリはアッシリア学者からの批判を恐れる心配はない」、と述べている<sup>19</sup>。

一方、ヨーロッパの東洋学者たちはラクーペリの研究に疑問を呈した。中国の古典「五経」の英訳者でオックスフォード大学教授 J. レッグ（James Legge）——ラクーペリは『中国上古文明の西方起源』のなかで彼が蔑みの目で自分の「西來說」を見ていることに言及している——は、中国の文字がそれより後の時代に出現した文字から影響を受けたとするラクーペリの比較言語学研究は方法論的に間違っていると指摘している<sup>20</sup>。一八九〇年三月、レッグはビクトリア学院（*Victoria Institute*）に提出した論文のなかで黄帝に關するラクーペリの議論を批判した<sup>21</sup>。これに対して、ラクーペリはレッグの文章は「非科学的言語」で書かれた通俗のものであると反撃している<sup>22</sup>。

ラクーペリを批判するもう一人の東洋学者はライデン大学の教授 G. シュレーゲル（Gustave Schlegel）であった。一八九一年、ラクーペリは『バビロンと東方記録』誌に論文を掲載し、中国の占星術を少なくとも一四六七一年前にまで遡ることができるというシュレーゲルの分厚い著書（*Uranographie Chinoise*）の論点を批判している<sup>23</sup>。これに対して、シュレーゲルは、H. コルディエ（Henri Cordier）と共編の『通報』（*T'oung Pao*）に反論の文章を掲載し、自らの考えは中国側の文献に基づいたものであ

り、確固たる根拠がない限り、中国文明はインド、カルデアもしくはほかの西方の国から輸入されたという考えは拒否すべきであるとし、故にラクーペリの「西來說」を認める「真の東洋学者は一人もいない」と一蹴した<sup>24</sup>。

ラクーペリがヨーロッパの東洋学研究を代表する二人の学者 レッグ と シュレーゲル の批判を受けたことから、その「西來說」が東洋学の主流に認められなかったことが分かる。ここで重要なのはラクーペリの「西來說」そのものの真偽を問うのではなく、「西來說」の内容および「西來說」が生まれた学問的背景を明らかにすることである。

前述の『中国上古文明の西方起源』のほかに、ラクーペリは数多くの「西來說」關連の著作や論文を発表した。以下は『中国上古文明の西方起源』以外の主な著作における「西來說」關連の部分の概要である。

1) 『中国文明の初期の歴史』。これはラクーペリが大英博物館で行った講演に基づいて編纂されたものである。そのなかで、ラクーペリは中国の言語と書物の特徴について紹介し、自らが長年「言語科学」の方法を用いて、古代の漢字とアッカド語（*Akkadian*）、エラム語（*Susian, Elamite*）との関連性を明らかにしたと述べている<sup>25</sup>。ラクーペリは中国文化とカルデア文化（*Chaldean culture*）の類似性について述べた後、黄帝の身分について次のように論証している。すなわち、中国語のなかで、*Hoang-ti* はもともと *Kon-ti* と発音する。中国の伝説によれば、黄帝家族の姓は *Nai*（もともとは *Nan* もしくは *Nak*）であり、これは *Nak-kon-ti* に由来したものである。*Nak-kon-ti* はエラム語文献のなかの諸神のトップである *Nakhunta* もしくは *Nakhunte* と驚くほど一致している<sup>26</sup>。このような比較言語学の方法を用いて、ラクーペリは倉頡（*Ts'ang Hieh*）・炎帝、中国古代の政治制度や風俗習慣はいずれもバビロン文明と関連性があると主張している。この講演は、後の「西來說」の原形である。

2) 『中国人以前の中国語』。これは漢族以前の中国土着民族の言語に關する著作である<sup>27</sup>。そのなかで、ラクーペリは「言語科学」の分類法と音韻比較法を用いて、初期の漢族や外部からの侵入者であるバク族の言語のなかの土着言語の要素を分析し、中国の先住民（特に苗族）とインドシナ諸民族（例えばミャンマの *Karengs*）の言語との関連性について考察している。ラクーペリにとって、インドシナの人口の大多数は何らかの形で中国の先住民族の人種的要素を備えている<sup>28</sup>。

3) 『中国最古の本——「易経」とその著者たち』。その主な内容は一八八二年一月に *The Athenaeum* 誌に掲載されている。当時ヨーロッパの東洋学界で『易経』が予言の書と見なされるのに対して、ラクーペリはこれを「カルデアの本、バビロンの本、もしくは外国語の辞書」と位置づけている<sup>29</sup>。『易経』と中国文明の西方起源との関連性について、ラクーペリは、「紀元前二二八二年、黄帝がバク族を率いて陝西の黄河上流域に來た時に使った言語はアッカド語とエラム語と深い関わりがあり、それが『易経』に記録されている西方の言語であると述べている<sup>30</sup>。

4) 『中国貨幣便覧』。これは大英博物館の古代貨幣の収蔵品に基づいて中国の上古史を言及したものである。後ろには中国上古史の年表が付けられている。ラクーペリによれば、紀元前二二八二年、黄帝は即位十五年目にバク族の

十六人目の首領として、部落の人々を連れて陝西の黄河流域に到着し、祭祀の儀式を行った。バク族は文字を書くのに長けて、金・白金や銀・銅・錫などで貿易を行っていた<sup>31</sup>。

5)『中央アジアと東アジアの文字の起源』。このなかで、ラクーペリはアジアの文字の歴史的起源について広く紹介し、バク族の西から東への移動、および中国の文物や伝説とインド、インドシナ半島のそれとの関係について論じている<sup>32</sup>。

以上のように、ラクーペリは言語・文献・文物の三つの角度から「西來說」を論証した。彼は自分が用いたのは「言語科学」と「歴史科学」の方法であることに自信を持っている。これは当時イギリスの学界で流行していた経験主義の研究手法である。ラクーペリは「西來說」の根拠として、当時流行の学問であったアッシリア学の最新の研究成果を引用している。前述のように、彼の「西來說」の支持者であるセイスはアッシリア学者であった。ラクーペリが編集する『バビロンと東方記録』の周辺には、バビロンや中国・インドの文明の起源を研究する学者が集まっていた。ラクーペリの中国文明「西來說」はこれらの人々によって共有される知識であったと言える。

一九世紀ヨーロッパの東洋学研究を視野に入れば、「西來說」は単なるラクーペリの中国古代史研究とアッシリア研究との対話の産物ではなく、「西來說」の最も重要な源はシノロジー (*Sinology*)、すなわち日本で「東洋学」と呼ばれる学問であった。ヨーロッパにおける中国文明「西來說」については、明末清初期に来華したイエズス会の宣教師たちに遡ることができよう。前出の韓子奇論文でも言及されているように、『易経』は神が発明した数学記号であったというラクーペリの主張は、フランス人宣教師ブーベ (Joachim Bouvet、中国名・白晋) から影響を受けたものである<sup>33</sup>。一八世紀のフランスでは、中国の文明はエジプトから起源を発したという「西來說」が現れ、バビロン起源説を論証するラクーペリの方法は、エジプト起源説のそれと類似している<sup>34</sup>。しかし、フランスの東洋学研究者たちは一九世紀四〇～六〇年代にすでに漢字起源の問題をめぐる議論していた。J. Oppert博士はバビロンの文字と漢字との関係、Francois Lenormantは漢字とエジプト文字との関係、G. Chauthierらは漢字・エジプト文字・バビロン文字三者の関係について論じた。実際に、ラクーペリは自分がこれらの研究から多くのヒントを得たことを認めている<sup>35</sup>。

もう一人の重要人物は宣教師J. エドキンス (Joseph Edkins、一八二三～一九〇五) である。ラクーペリはしばしばその研究を名指しで批判しているが、明らかに彼はエドキンスの「西來說」から影響を受けている。エドキンスは一八七一年に言語学の観点から中国語と西アジア言語との関係を論じた著書を出版し、中国人が紀元前三千年に *Mohammedan Tartary* から甘肅・陝西に移住し、黄河西岸に移住地を建設したと明言している<sup>36</sup>。彼は『教務雑誌』 (*Chinese Recorder*) と『中国評論』 (*The China Review*) に論文を発表し、それぞれバビロン文字と漢字、中国語とヘブライ語との関連性を論じている<sup>37</sup>。しかし、エドキンスとラクーペリとの間には決定的な違いが存在する。それは、エドキンスが東西言語同士の共通性を強調す

るのに対して<sup>38</sup>、ラクーペリは時系列的に両者の前後関係を重視している、ということである。また、黄帝について、ラクーペリは中国の文献に記載されていることをそのまま事実とし、それをバビロンの出土品に関連づけ、黄帝がバク族を率いてバビロンから中国に移住してきたという物語を作りあげた。これと対照的に、エドキンスは、黄帝という人物は「そもそも書と詩(『尚書』と『詩経』——引用者)には見当たらない」ため、黄帝の実在性に疑問を呈している<sup>39</sup>。

以上のように、ラクーペリの「西來說」はレッグとシュレーゲルなどから批判を受けたが、彼は当時のヨーロッパの東洋学界で完全に孤立したわけではなかった。ラクーペリが自らの本のなかで謝辞を捧げたR. ダグラス (Robert K. Douglas) は、その間違いだらけの中国語手引き書『華語鑑』の序文のなかで、中国人が紀元前三〇〇〇年ごろにバビロンの文化をもって中国に移住したという説は「現在すでに広く認められている」と述べている<sup>40</sup>。また、コルディエはラクーペリの「西來說」を一家言として紹介している<sup>41</sup>。彼はラクーペリの「西來說」がほとんど相手にされていない時、自分の研究のなかでラクーペリの「西來說」を先行研究として取り上げ<sup>42</sup>、ラクーペリの支持者・援助者であるユールの著作を修訂する際に「西來說」に関する内容を加えた<sup>43</sup>。

ラクーペリは彼の個人色が強く現れている『バビロンと東方記録』の編纂を通じて、中国文明「西來說」に関する研究を進めていたが、彼の死後、この雑誌は急速に求心力を失い、ついには一九〇〇年休刊して幕を閉じた。

## 二、オリエンタリズムと東洋学の間——明治日本における中国文明「西來說」の受容

一八九四年二月二三日、徳富蘇峰主催の『国民之友』誌の「海外思潮欄」に掲載された記事「支那人種はバビロン人なり」は、英文記事「支那人種に関する新智識」を引用する形で、中国人種のバビロン起源説を紹介している<sup>44</sup>。しかし、引用部分の内容はもとの英文記事との間に大きな隔たりがある。もとの英文記事は一八九二年一月二月 *Harper's New Monthly Magazine* 誌に掲載された Mcdowell 執筆の「中国人に関する新しい見方」と題する記事である<sup>45</sup>。この文章はサンフランシスコに住む中国人の新年を祝う風習を紹介するもので、中国人種の起源に関する新発見ではない。この記事が日本の雑誌で取り上げられたのは、バビロンが言及されているからである。それによれば、中国の「門神」(*gods of the door*) はすなわちバビロンの暦にある双子座である。そして、それに関する注釈のなかにラクーペリの名前が現れている。つまり、前出の『国民之友』誌の文章は原文の趣旨を離れて、「中国人に関する新しい見方」という題名だけにスポットを当てたのである。とはいえ、筆者が注目したいのは、ラクーペリ『中国上古文明の西方起源』の出版と同じ年に、「西來說」はすでに日本で注目されるようになった、ということである。

そして、その二年後の一八九六年三月、桑原隲藏 (一八七〇～一九三一) は、『国民之友』誌に「支那ノ太古ニ関スル東洋学者ノ所説ニ就キ」と題した長文を連載し、

「西來說」を真っ向から批判している<sup>46</sup>。そのなかで桑原は、ヨーロッパの東洋学研究はエジプト、バビロンの歴史的起源を絶えず上に遡る一方で、中国の歴史を次第に短くすることによって後者が地中海から伝来したものと見なす傾向があるとし、このような研究に以下の二つの問題があることを指摘している。第一に、中国上古史の紀年が正確かつ信憑性が高いのと対照的に、「夫ノ埃及学者が、彼国ノ年代ヲ定ムルニ当リテ金科玉条スル『マネソ』ノ記録ノ残編零々トシテ、然モ其紀年ノ甚ダ不明ナル者トハ、其歴史上ニ於ケル価値、固ヨリ日ヲ同クシテ談ルベカラザルモノアリ」、「之ヲ夫ノ埃及巴比倫等ノ年代ノ、漠焉タル者ニ比シテ、頗ル信憑スルニ足アルヲ知ルベシ」<sup>47</sup>。第二に、桑原は「西來說」が主張する中国上古文明が西方から影響を受けたことを認めながら、「然レモ此等ノ交通ノ有無ハ、彼等ノ要求スルガ如ク、支那ノ文明ノ悉ク埃及若クハ迦勒底亜ヨリ伝来セシコトヲ証明スルニ於テ殆ンド何等ノ効力ヲモ有セザルナリ」<sup>48</sup>。「大凡此等幾多ノ伝説、単に社会学上ヨリ觀察ヲ下スモ、支那人種ノ故郷ハ今日ノ東鞏韌地方ニ存セシコト、必シモ推測シ難キニアラザルベシ」<sup>49</sup>と。ドイツの地理学者F.リヒトホーフェン（Ferdinand von Richthofen）の中国文明の「中央アジア起源説」に対して「吾人ハ二見解ヲ異ニスル所ナキニ非ズト雖モ、大体上氏ノ所説ニ賛同セントスル者ナリ」<sup>50</sup>。つまり、桑原隲藏はラクーペリの「西來說」を批判し、中国文明の「中央アジア起源説」（＝「東鞏韌地方」）を唱えているのである<sup>51</sup>。

桑原隲藏の論文が発表されて数ヶ月後、三宅米吉（一八六〇～一九二九）は一八九六年八月号の『史学雑誌』にラクーペリの「西來說」を紹介した<sup>52</sup>。三宅は、「余英国に在り、初めて此の雑誌を得て爾來常に講読し以て氏が研究の如何に進むべきかに注目したりしに、一昨年（一八九四年——引用者）に至り不幸にして氏終に死去し其の研究の半途にして止みし最惜しむべきなり氏死する年此の雑誌に載せたる諸項に更なる数章を加えて*Western Origin of the Early Chinese Civilization* (Asher & co. London) と題する一書を発行したれば氏の説の大意を知らんと欲する者は此の書を繙きて可なり」と述べている。彼は「西來說」に賛同する立場から、中国文化は次第に発生したのではなく、四千年前に突然花を開いたため、「是れ所謂聖人なる者の発明せしにあらで必他国より輸入せし者なること疑ふべからず」というラクーペリの観点を繰り返し<sup>53</sup>、「大体に於てい未信容し能はずと雖其の學術制度等彼此同一なるものの多きと、中にい実一致の尤著しくして彼此の間太古より既に關係ありしとの確証と為すに足るべきが如きものあるとい特に注意すべき所とす」と述べている<sup>54</sup>。つまり、三宅はラクーペリの「西來說」に完全に賛同するまでには至らないものの、基本的にはラクーペリの学説に賛成していた。後に三宅の弟子白鳥庫吉は師の伝記のなかで、この論文を三宅の西域研究の「余波」として位置づけている<sup>55</sup>。

同時代日本の東洋史研究者のなかで、白鳥庫吉（一八六五～一九四二）はラクーペリの著作を最も仔細に研究した人であったろう。彼が明治三〇年（一八九七年）以降に書いた論文にはラクーペリの名がしばしば登場する<sup>56</sup>。「西來說」に言及したのは主に一九〇八年以降のことである。

一九〇八年、白鳥は史学会で行った講演のなかで、古代中国の文献の西王母叙述について、西王母は幾世代もの中国人によって作り出されたものであり、「支那人の西域に関する智識が漸く進むと共に西王母の位置の随つて西徙する」と主張している<sup>57</sup>。一九〇九年八月、白鳥庫吉は『東洋時報』に掲載された論文「支那古伝説の研究」のなかで、堯・舜・禹は「三才」思想に基づいた「伝説構造」上の人物であり、それぞれ「天」「地」「人」を司る者であると主張している<sup>58</sup>。これに対して、林泰輔は白鳥の主張を「堯舜禹の抹殺論」と名づけて「況や天地人の三者を対等とするに於てをや。これ周代以前にこの思想のまだ起らざる所以なり。而して尚書の虞夏書商書はこの思想のまだ起らざる時に於て記載せしものなれば、天地人三才の思想を以て之を解釈することは牽強を免れざるなり」と厳しく批判し<sup>59</sup>、両者の間には筆戦が繰り広げられていた。一九一二年二月、白鳥庫吉は東洋協会での講演のなかで、三才思想の根拠として、天地人三才・陰陽・二十八宿・五星・五行などはすべて西アジアのカルデアとイラン、インドに由来したとしている<sup>60</sup>。ここで重要なのは、白鳥庫吉にとって、今から三千年以前より前の中国の歴史はすべて根拠のないもので、今から三千年前より以後の歴史は西アジアから伝来したものと中国本土のものが混合して出来たものである、ということである<sup>61</sup>。文明の進化の時間軸に沿って中国上古の歴史をメソポタミア文明の後に位置づけるという点において、白鳥庫吉とラクーペリは共通している<sup>62</sup>。しかし、両者の間に大きな相違点がある。すなわち、ラクーペリが中国の上古に「歴史」が存在するという前提の下で「西來說」を唱えたのに対して、白鳥庫吉は中国の上古史そのものの「実在性」を否定したうえで、中国の歴史を「西來說」の文脈のなかで説明しようとしている、という点である。ラクーペリは東西文明の間に類似点があることから出発し、「黄帝はバビロンより来たり」というドラマティックな物語を語った。一方、白鳥庫吉の中国文明「西來說」においては、黄帝という主人公——ラクーペリ「西來說」の中心内容——は姿を消している。その結論は前述したエドキンズのそれに似ている。

ラクーペリ「西來說」に対する桑原隲藏・三宅米吉・白鳥庫吉の異なる態度には、一九世紀から二〇世紀にかけての世紀転換期における日本の中国史叙述に存在するヨーロッパのオリエンタリズムが微妙に映し出されている。桑原隲藏が中国のテキストと中国史の文脈に即して歴史叙述を行うのと対照的に、白鳥庫吉は中国の古代文献そのものを相対化し、そこに「西来」の要素を組み入れた。このことは白鳥と林の論戦に端的に表されている。

ところで、「西來說」はヨーロッパから伝来した新しい知識として日本の東洋史学界で注目を浴びたとはいえ、当時出版された支那史、東洋史の教科書においてはまだ「常識」として取り上げられていない。一八八八年出版の那珂通世の『支那通史』も、その十年後に刊行された桑原隲藏の『中等東洋史』もラクーペリの「西來說」には言及していない<sup>63</sup>。他方、「西來說」は悄然として大衆向けの書物には登場していた。一九〇〇年六月、博文館の帝国百科全書の一冊として出版された白河次郎・国府種徳共著の『支那文明史』は、ラクーペリの「西來說」を全面的に踏襲している<sup>64</sup>。この『支那文明史』こそ、後に「西來說」が中

国に受容される直接的なきっかけであった。

『支那文明史』全十一章のうち、前の三章がヨーロッパ人の「西來說」に関連している。第一章では、太古の東洋史は中国文明とメソポタミア文明が融合して構成されたとし、中国で最も古い民族の一つである漢族は黄帝に従ってカルデアからパミール高原を超え、アジア大陸の大平原を経て黄河流域に移住したものである。黄帝は文明を広め、黄河を渡って古い苗族を中国の本土から追い出した、と述べている<sup>65</sup>。第二章では、盤古から伏羲までの神話の歴史を中国上古の歴史とし、旧約聖書の紀年に従って、伏羲は大洪水から命を逃れたノアの長男セム(Sem)の子孫で、中国河南省の開封府に移住し、「植民」と「教化」の歴史を始めたとし、神農・黄帝およびその後継者を経て、禹は中国最初の王朝を建てたと述べている。注目に値するのは、ここでの記述はキリスト教の記述と類似している点である。

第三章では、黄帝より後の時代の中国人はバビロンから移住してきたとされている。それによれば、中国文明はアジアの西北部に突然現れたもので、それ以前の文明の影響を受けたのは確実であり、これは中国上古の遺物や伝説によって証明されている。そして、ラクーペリの「西來說」に従って、黄帝がバク族を率いてトルキスタンを経て崑崙、すなわち「花国」の東方に來たと述べている。この章はラクーペリ『中国上古文明の西方起源』の第五章に基づいて、学問と技術、文字と文学、制度と信仰、伝説、の四つの角度から「西來說」の内容を紹介している。次節で見るように、『支那文明史』の第三章の内容が清末の中国知識人が「西來說」を受け入れるきっかけとなったのである。

## 注

- 1 Terrien de Lacouperie, *Western Origin of the Early Chinese Civilisation from 2300 B.C. to 200 A.D.*, London: Asher, 1894.
- 2 繆鳳林「中国民族西來辨」、『學衡』第37期(1925年1月)。
- 3 顧頡剛・王鐘麟編、胡適校「現代初中教科書本國史」(上冊)、商務印書館、1925年、10~12頁。
- 4 何炳松「中華民族起源之新神話」、『東方雜誌』第26巻第2号(1929年1月25日)。
- 5 金兆梓「中国人種及文化之由来」、『東方雜誌』第26巻第24号(1929年12月25日)。
- 6 一九三〇年以降、ラクーペリの「西來說」に言及する人はごく少数であるが、「西來說」は研究者の間でなお一定の影響がある。一例として、歴史学者劉昉遂が三〇年代に書いた「中華人種西來新証」がある(『越風』第2巻第4期、1937年4月30日。『劉昉遂文集』、北京師範大学出版社、二〇〇二年)。なお、現代の研究者のなかでも「西來說」(バビロン説)に賛成する人がいる。たとえば、白川静『白川静著作集』6(神話と思想)(平凡社、1999年、162~168頁)。森雅子『西王母の原像——比較神話学試論』(慶応義塾大学出版会、2005年)。新疆天山天池管理委員会編『西王母文化研究集成』(論文巻)上巻(広西師範大学出版社、2008年)。
- 7 孫隆基「清季民族主義と黄帝崇拜之發明」、『歴史研究』2000年第3期。
- 8 石川禎浩「20世紀初頭の中国における『黄帝』熱」、『二十世紀研究』第3号(2002年12月)。
- 9 楊思信「拉克伯里的“中国文化西來說”及其在近代中国的反響」、『中華文化論壇』2、四川省社会科学院、2003年。李帆「關於拉克伯里學說進入中国的若干問題」、『西南民族大学學報』2008年第2期。
- 10 吉開将人「苗族史の近代——漢族西來說と多民族史觀」、『北海道大学文学研究科紀要』124、2008年2月。
- 11 TZE-KI HON, "From a Hierarchy in Time to a Hierarchy in Space: Meanings of Sino-Babylonianism in Early 20<sup>th</sup> Century China." *Modern China*, March, 2010:36(2). (附記: 本論文の中国語版とハングル版は、それぞれ『歴史研究』(2010年第1号、2010年2月)と) concept and communication (No.5, 2010.6)

(に掲載されている。)

- 12 拙稿「連続性と断絶——清末民初歴史教科書里的黄帝叙述」、王笛主編『時間・空間・書寫』(新社会史3)、浙江人民出版社、2006年。「連続と断絶——二十世紀中国歴史教科書における黄帝叙述」、『中国研究月報』2008年10月号。
- 13 たとえば、F.ディクター(Frank Dikötter)の『近代中国の種族言説』において、中国語圏におけるラクーペリ「西來說」の受容を次の二段階に分けている。すなわち、①ラクーペリ『中国上古文明の西方起源』から白河次郎・国府種徳の『支那文明史』まで、②『支那文明史』から『新民叢報』に連載された観雲(蒋智由)の「中国人種考」まで、である。ディクターの観点はその後のほとんどの研究に踏襲された。しかし、実際に、東アジアにおける「西來說」の受容過程はディクターが描いたものに比べてはるかに複雑である(Frank Dikötter, *The Discourse of Race in Modern China*, London: Hurst & Company, 1992, p.120)。ちなみに、近代中国における「種族」知識の形成に関する同書の主張について、筆者は別の論文で異なる意見を述べている(拙稿「差異化された皮膚——近代日中教科書における人種叙述」(ハングル)、『大東文化研究』第65号、韓国成鈞館大学、2009年3月)。
- 14 H.M.Mackenzie, "Memorial Notice of Prof.Terrien de Lacouperie," *The Babylonian and Oriental Record*, Vol.7, No.1, July 1894, pp.262-264.
- 15 ラクーペリの生年は一般的に1845年とされるが、本稿ではMackenzieの弔文に従って1844年とする。
- 16 H.M.Mackenzie, op.cit.
- 17 Terrien de Lacouperie (1894), p.112.
- 18 H.M.Mackenzie, op.cit.
- 19 *The Babylonian and Oriental Record*, Vol.2, No.9, August 1888, pp.218-220.
- 20 Terrien de Lacouperie (1894), p.293.
- 21 レッグは、中国人(Chinese tribe)はノアの子孫であり、西方より黄河上流に移住したと述べている(James Legge, *The Chinese Classics*, Vol. III. Part I, Hong Kong: London Missionary Society's Printing Office, 1865, pp.189-190)。
- 22 Terrien de Lacouperie, "The Onomastic Similarity of Nai Hwang-ti of China and Nakhunte of Susiana," *The Babylonian and Oriental Record*, Vol.4, No.11, October, 1890, p.256.
- 23 Terrien de Lacouperie, "From Ancient Chaldea and Elam to Early China: A Historical Loan of Culture," *The Babylonian and Oriental Record*, Vol.5, No.4, April 1891, p.84.
- 24 Gustave Schlegel, "China or Elam," *T'oung Pao*, Vol.11, 1891, pp.244-246.
- 25 Terrien de Lacouperie, *Early History of the Chinese Civilisation*, London, 1880, pp.18, 20-21.
- 26 Ibid., p.27.
- 27 Terrien de Lacouperie, *The Languages of China Before the Chinese*, London, 1887. ちなみに、ラクーペリによれば、同書は1889年に碑銘学術賞(*Académie des Inscriptions*)を授与されている(Terrien de Lacouperie, 1894, p.291)。
- 28 Terrien de Lacouperie (1887), p.14.
- 29 Terrien de Lacouperie, *The Oldest Book of the Chinese, The Yh King and its Authors*, VOL. I., History and Method, London, 1892, vi.
- 30 Terrien de Lacouperie (1892), p.106.
- 31 Terrien de Lacouperie, *Catalogue of Chinese Coins from the VIIth Cent. B.C. to A.D. 621*, London and Paris, 1892, Introduction, viii.
- 32 Terrien de Lacouperie, *Beginnings of Writing in Central and Eastern Asia, or Notes on 450 Embryo-Writings and Scripts*, London 1894.
- 33 David E. Mungello, *Curious Land: Jesuit Accommodation and the Origins of Sinology*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GmbH, 1985, pp. 74-105.
- 34 後藤末雄著、矢沢利彦校訂『中国思想のフランス西漸』2、平凡社、1969年、262~286頁。
- 35 Terrien de Lacouperie, "The Old Babylonian Characters and Their Chinese Derivates," *The Babylonian and Oriental Record*, Vol.2, No.4, March 1888, p.74. また、ラクーペリの言及していない以下のG.Chauthierの著作を参照されたい。*Histoire des Relations Politiques de la Chine avec les puissances Occidentales*, Paris, 1859, pp.6-7.

- 36 Joseph Edkins, *China's Place in Philology: An Attempt to Show that the Languages of Europe and Asia Have a Common Origin*, London, 1871, p.31.
- 37 エドキンスの「西來說」については、稿を改めて論じることにはしたい。
- 38 艾約瑟『西学啓蒙十六種・西学略述』、巻二、上海図書集成印書局、光緒二十六年(1900)。
- 39 艾約瑟「論黄帝」、『万国公報』(十九)、光緒十七年(1891)四月。
- 40 Robert K. Douglas, *A Chinese Manual*, London: Sampson Low, Marston & Company, 1889, p.13.
- 41 Henri Cordier, "Half A Decade of Chinese Studies(1886-1891)," *T'oung Pao*, Vol.3, 1892, pp.548-549.
- 42 Henri Cordier, *Histoire Générale de la Chine*, Paris: Librairie Paul Geuthner, 1920, pp.27-28.
- 43 Henry Yule(new edition by Henri Cordier), *Cathay and the Way Thither: Being a Collection of Medieval Notices of China*, Vol.1, London, 1915, p.8.ヘンリ・ユル著、アンリ・コルディエ補、東亜史研究会訳・編『東西交渉史:支那及び支那への道』、帝国書院、1944年、15～18頁。
- 44 『国民之友』第182号、明治二十六年二月二十三日、38頁。
- 45 Henry Burden McDowell, "A New Light On the Chinese," *Harper's New Monthly Magazine*, Vol.LXXXVI, No. DXI, December 1892.
- 46 桑原騰藏「支那ノ太古ニ関スル東洋学者ノ所説ニ就キ」、『国民之友』第287号、明治二十九年三月十四日。第288号、明治二十九年三月二十一日。『桑原騰藏全集』第一巻、岩波書店、1968年、121～136頁。
- 47 桑原騰藏前掲文、『国民之友』第287号、617頁。
- 48 桑原騰藏前掲文、『国民之友』第288号、676頁。
- 49 同上、678頁。
- 50 同上、679～680頁。
- 51 桑原騰藏は『東洋史教授資料』の中で中央アジア起源説を繰り返し述べている(『東洋史教授資料(増補)』、東京開成館、1914年初版、1923年)。
- 52 三宅米吉「ラクウベリ氏が支那古代の開化の起原に就ての説」、『史学雑誌』第7編第8号(明治二十九年八月十五日)、69～70頁。
- 53 同上、70頁。
- 54 同上、77頁。
- 55 白鳥庫吉「文学博士三宅米吉小傳」、『白鳥庫吉著作集』第10巻、岩波書店、1971年、193頁。
- 56 『白鳥庫吉著作集』第四巻と第六巻を参照。
- 57 白鳥庫吉「西王母に就いて」、『史学雑誌』第19編第3号、明治41年3月。『白鳥庫吉著作集』第9巻、146～147頁。
- 58 白鳥庫吉「支那古傳説の研究」、『東洋時報』第131号、明治42年8月。『白鳥庫吉著作集』第8巻、381～391頁。
- 59 林泰輔「堯舜禹の抹殺論に就て」『漢学』第二編、第七号。『支那上代之研究』、進光社、1927年版、1944年再版、15頁。
- 60 「『尚書』の高等批評(特に堯舜禹に就いて)」、『東亜研究』第2巻第4号、明治45年4月。『白鳥庫吉著作集』第8巻、393～398頁。
- 61 「この固有の思想と五行等の新来思想とが合せる時、その宗教的方面に結びつきしは方士の類なり。後に道教となり風水説となれり。その道德的方面に結びつきしは儒教也、易也。而して『書経』『禮記』は五行分子多く、孔子の説は道德的分子に富みたり。」「『尚書』の高等批評(特に堯舜禹に就いて)」、398頁。
- 62 Tanakaはその著書のなかで白鳥庫吉がラクウベリの「西來說」に異議を唱えたと主張したが、実際には白鳥はそれを支持する立場であった。Stefan Tanaka, *Japan's Orient*, Berkeley: University of California Press, 1993, p.90.
- 63 那珂通世編『支那通史』、大日本図書株式会社、1888年9月初版、12月再版。桑原騰藏『中等東洋史』(1898年)、『桑原騰藏全集』第四巻、岩波書店、1968年。
- 64 白河次郎・国府種徳『支那文明史』、博文館、1900年。
- 65 同上、4頁。



